

前期：現代キリスト教思想研究1——近代から現代へ

オリエンテーション——現代キリスト教思想の諸動向

1. 西欧近代とキリスト教
2. 自由主義神学1——シュライアマハー
3. 自由主義神学2——リッチェルとハルナック
4. 自由主義神学3——トレルチ
5. ヘーゲルとヘーゲル主義
6. 近代聖書学と宗教史学派
7. キリスト教と社会主義
8. 弁証法神学1——バルト
9. 弁証法神学2——ブルトマン
10. 弁証法神学3——ティリッヒ 6/27
11. 解釈学的神学とブルトマン学派 7/4
12. 研究発表：岡田勇督、齋藤伎璃子 7/11
13. 研究発表：山田奈緒美、張旋 7/18
14. 研究発表：山下毅、山本恵美 8/1

<前回>ブルトマン

(1) ブルトマンと非神話化

1. 聖書学者ブルトマン → バルトの弁証法神学への関与以降も、自由主義神学との関わりを保持。
2. 近代的世界観と聖書的世界観（黙示文学、グノーシス主義＝神話論）との対立
近代人は聖書的な宗教を信じうるか？
→ 信仰と世界観との関連はいかなるものか、両者は分離可能か。
3. 聖書の非神話論化(Entmythologisierung)と実存論的解釈
4. キルケゴールの真理論：客観的真理と主体的真理
信仰と世界観との区別・分離 → 信仰の主体性の純化
5. 聖書を非神話論化することによって、実存論的解釈によって、主体的真理を取り出す。
世界観という形式ではない仕方での信仰の表現。
ハイデッガー哲学（『存在と時間』）の枠組み（本来性・非本来性）
創造物語：古代人の天文学や生物学の理論ではなく、神の語りかけに聴従し応答する人間。
人間存在の善性のメッセージ、信仰とは神の語りかけに対する「今ここ」の決断。
6. 説教というモデル（プロテスタント・ルター派的？）
7. ブルトマンの問題点
 - ・信仰と世界観とは分離可能か、分離すべきか。形式と内容の分離？
決断の抽象化
 - ・神話あるいは構想力の理解が一面的ではないか。
神話は過去の遺物か、構想力の解放性についてブルトマンは理解しているのか。
 - ・近代的世界観あるいは個人主義的信仰を自明の仕方前提にしていなか。

科学技術や個人主義への批判はブルトマンから可能か？

(2) ブルトマンの信仰論の要点

- ①言葉の出来事性→語りかけ→言葉における継続・出会い→応答・決断
- ②時間性—終末論的（そのつどの今）→決断・聴従
- ③理解：神理解—自己理解（神学—人間学）
- ④実存的な自己理解（自己の存在可能性）と歴史的知識・世界観との相違
- ⑤客観性→主観性・主体性
→自由の処理できない・神の主権

10. 弁証法神学3——ティリッヒ

(1) ティリッヒ思想とその射程

1. ティリッヒ(1886-1965)

神学と哲学の境界（神学者・哲学者）、宗教社会主義、文化の神学、宗教史の神学
ドイツからアメリカへ → 現代キリスト教思想は理論と実践の両面で変革を必要と
している。

ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965) : ドイツ生まれのプロテスタント神学者、宗教哲学者。
ベルリン、テュービンゲン、フランクフルトなどの諸大学で教え、宗教社会主義の理論家
として活躍。33年にヒトラー政権によって教授職から追放され、アメリカ亡命後はユ
ニオン神学校、ハーヴァード、シカゴの諸大学で活躍。アメリカの神学と宗教哲学に大き
な影響を与えた。ティリッヒ思想の特徴は、自伝「境界において」の表題にあるように、
宗教と文化、神学と哲学、観念論とマルクス主義など、緊張関係にある二つの領域の境界
で思索を展開している点に認められる。アメリカ時代の代表著作『組織神学』（全三巻
新教出版社）では、人間存在の中に構造的に組み込まれた諸問題が宗教的問いとして哲学
的に取り出され（哲学的神学）、その問いに対してキリスト教のメッセージがいかに答
えるかが体系的に示された。この組織神学の方法論が「相関の方法」である。ティリッヒの
影響は神学や宗教哲学を超えて宗教学全般に及んでおり、究極的関心という信仰概念や、
信仰の具体的表現形態を扱うシンボル論はとくに重要である。晩年は、日本の宗教者との
交流などを通じて宗教史の神学を構想するに至るが、未完に終わった。（『岩波キリスト
教辞典』）

2. ティリッヒのフォイエルバッハ論

- ・ヘーゲル（本質主義）批判の文脈：実存主義、マルクス、キルケゴール
- ・近代の宗教批判の先駆者、宗教的象徴あるいは神話の消極的理論（還元主義）の代
表者
- ・フォイエルバッハへの肯定と否定

3. 宗教的象徴の理論：狭義の宗教を構成するもの

- ・象徴の概念規定：多義性（非本来性）、指示、開示、参与（力・作用）、承認
- ・宗教的象徴：無制約的なものを指示し、経験へと開示する。意味根拠の形態化・具
体化する。

4. 狭義の宗教の構造：啓示相関（出来事と受容との相関）

- ・広義の宗教（意味世界の根拠付け）の具体的な現実化

究極的関心（ultimate concern）と自己同一性

- ・宗教的象徴の真理：経験への適切性と自己否定性（十字架）
- ・問題：象徴の指示対象とは何か → 宗教的实在論、宗教的真理論

5. 宗教と社会

「意味世界の根拠付け」の二面性：正当化と転換（イデオロギーとユートピア）
社会主義とキリスト教とは一致しうるか？

社会正義と愛における基本的な一致：社会主義は必ずしも無神論ではなく、キリスト教の救いは単なる個人の内面の事柄ではない。

（2）ティリッヒ神学の方法と体系

6. ティリッヒ組織神学構想：

「相関の方法」（Method of Correlation）によって構成される体系の横軸（横構造）
+ 三位一体論的あるいは救済論的な体系の縦軸（縦構造）

7. 神学の解釈学的構造と循環

1) 「相関の構造」：「問いと答え」の相関＝解釈学的構造

- ・問いの定式化（哲学）←状況
- ・メッセージの答えとしての提示・解釈（神学）

2) 「個と共同体」の循環：共同体における問答・討論・対話の個人による集約

8. 「問いと答え」の定式化における哲学（あるいは哲学的要素）の役割

問いと答えは自律性を保ちつつも、相互に依存し合っている。

↓

「諸科学、哲学、神学（答えとしてのメッセージの解釈）」の三者関係。

づけが問題となるということである。

9. 「すべての神学的労作の一つの極である『状況』とは、個人や集団がその中において生きるところの経験的な心理学的社会的状況を意味しない。その状況とは、彼らが彼らの実存の自己理解をその中で表現するところの科学的、芸術的、経済的、政治的、倫理的諸形態の総体を意味する」、「神学が考えなければならない『状況』とはそれぞれの時代にさまざまな心理学的社会的諸条件下においてなされる創造的な実存の自己理解である。」（4）

10. 解釈学的中心（意味付与原理）としての規範：多様な素材を一つの意味連関へとまとめあげ、神学に組織あるいは体系という統合的な形態を与える。神学者の共同体性。

	Question	Answer
Vol.1 Introduction		
Part I	Reason	Revelation
Part II	Being	God
Vol.2 Part III	Existence	Christ
Vol.3 Part IV	Life	Spirit
Part V	History	Kingdom of God

・ Being / Existence / Life ・ History

• God / Christ / Spirit : Trinity
Creation / History / Eschaton • Eternity : History of Salvation

<参考文献>

0. *Tillich • Main Works • Hauptwerke. 1 - 6*, de Gruyter.
1. ティリッヒ『組織神学』第一、二、三巻、新教出版社。
Paul Tillich, *Systematic Theology. Vol.1, 2, 3* (1951, 1957, 1963),
The University of Chicago Press.
2. 『ティリッヒ著作集』白水社。
3. 芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。
『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。